

その後、〇一年一・二月号から宮川健郎さんに編集長が替わりましたが、では宮川さんお願いします。

宮川 ぼくは、九八年の四月に東京にもどってきたんです。その前一五年間、仙台の大学に勤めていました。それが東京の大学に移り、もどってきたら編集長をやりたいと。

西山 編集委員はやっていなかったんですか。

宮川 仙台の時に一期やってました。藤田のぼる編集長の時ですね。帰京したのと『日本児童文学』編集長になったのが、ほぼ重なっていて、編集委員は一期目は五人。ぼく、わりと社会性がないものだから、個人的にも親しくて、話を通る人じゃないと困ると思って、藤田のぼるさんを担ぎ出し、あと石井直人君も。批評の方はその二人とぼくで何とかしようと思ってました。あとは作家。一期目はもう亡くなってしまったけれど、ときありえさん。それに牧野節子さん。二期目は牧野さんに残っていたら、佐々木赫子さん、はたちよしこさん、西山さんに入ってもらいました。**奥山** そして〇五年の一月から長谷川潮さんになるわけですが。

長谷川 私は〇五年の一・二月号からになるわけですが、藤田のぼるさんから、とにかくやってもらわなけりゃ困ると談判されました。ただし日本児童文学者協会（以下、児文協）の中の状況とか、知らないものですから、藤田さんが入ってくれるならばやりますという交換条件をお願いします

たんですね。まあ彼がいなければ、難しかったと思います。それでメンバーは、一期目は河野孝之さん、川北亮司さん、菊永謙さん、西山利佳さん。二期目になると、川北さんと菊永さんが抜けて、今西乃子さん、丘修三さん、尾上尚子さんが交代で入って、まあなんとかやりました。わたしは図書館で三五年間働いた人間で、作る側じゃなくて受け止める側の発想でいこうという感じはありました。

奥山 では、その後の編集長の西山さんお願いします。

西山 わたしが担当したのは〇九年からです。まず一期目の編集委員は大高ゆきおさん、尾上尚子さん、関谷ただしさん、芹沢清実さん、中野幸隆さん、真鍋和子さん、それにわたしを入れて七人の体制でした。わたしは中野さんと、ほとんど話したこともないし、大高さんはお会いしたこともありませんでした。これは宮川さんの組み方と、対照的だったと思います。以前中野さんが会報のZb通信で『日本児童文学』に厳しいご意見を書いていたのが気になっていて、この際、編集委員に入ってもらったほうがいいと考えたんです。ですから、編集会議では鍛えられたなと思いました。二期目は入れ替わって、いずみたかひろさん、小川英子さん、奥山恵さん、牧野節子さん、間中ケイ子さんに入っていたいただきました。二期目は知っている人たちでいきました。

自分が編集長になった〇九年というのは現代児童文学が